

調査の概要

1. 調査の目的

助産婦は、過去に「お産婆さん」として地域の住民に親しまれていた時代があった。しかし現在、自営助産婦は数的に少なくなってしまった。

近年、助産婦学校を卒業した助産婦の就業先は、病院が最も多い。しかし、病院では、正常分娩であっても分娩介助の役割をとるのはもっぱら産婦人科医師で、助産婦の役割は看護婦と区別がつかないといわれる施設が増えているという声が多い。このような状況下で、助産婦は自分たちの業務についてどのように考えているのか、また今後どのような仕事をしていきたいと考えているかを明らかにする。そして、産（婦人科）婦長、看護部長、産婦人科医師は、助産婦の役割をどのようにとらえているか。出産したばかりの母親は、助産婦の仕事をどのように評価しているかを明らかにする。これら5種類の調査は、今後あるべき助産婦の業務役割を検討していくための基礎資料として提供することを目的としている。

2. 調査対象

産科・婦人科を有する200床以上の、1,174病院の看護部長、産婦人科医師、産（婦人）科病棟婦長、助産婦、各1,174名。

助産婦は年齢層が均等にばらつくように病院ごとに20代から50代まで、年齢層を指定した。産婦人科医師に関しては、医長クラスの医師層を対象とする。母親対象の調査は、そのうちの94施設（各都道府県より無作為に2施設選出）で調査期間に出産した褥婦1,410人を対象とした。褥婦

は、第1子を正常分娩で出産した全員。

3. 調査方法

看護部長に挨拶状と4または5種類の調査票及び返信用封筒を送付し、看護部長を通じて婦長、医師、助産婦に各1票ずつ手渡していただいた。

母親対象の調査は、婦長を通じて入院期間中に調査票を手渡していただいた。

回収は、それぞれ返信用封筒に封入し、各自日本看護協会調査研究室宛て送付していただいた。

4. 調査実施時期

1992年2月調査票郵送。3月末日回収締め切り。

5. 調査票回収率

助産婦票	840票（回収率71.6%）
看護部長票	817票（回収率69.6%）
産（婦人）科病棟婦長票	849票（回収率72.3%）
産婦人科医師票	803票（回収率68.4%）
母親票	957票（回収率67.9%）

6. 報告書の構成

上記の通り、本報告は5種類の調査から成っている。調査の概要については、それぞれ共通しているのでここで紹介した。調査結果についてはそれぞれ章立てして紹介する。

7. 調査の担当

助産婦の役割に関するプロジェクトを発足し、助産婦のかかえている諸問題の検討、調査票作

成，調査結果等について意見をいただいた。調査票設計，調査実施，集計，執筆は調査研究室で実施した。助産婦票，医師票は調査研究室・藤田和夫が担当し，看護部長票，産科婦長票は助産婦職能委員会の意見を採用し，フリーアンサーはプロジェクト委員と共に分析・検討を行った。母親票は調査研究室・林幸範が担当した。なお，報告書のとりまとめは藤田和夫が行った。

助産婦の役割に関する調査プロジェクト委員

斎藤恭子 武蔵野赤十字病院母子保健相談室

園生陽子 聖母女子短期大学専攻科

神谷整子 八千代助産院

西村晶子 東京厚生年金病院（日本看護協会助産婦職能委員）

吉岡和子 三楽病院（日本看護協会助産婦職能委員）

野村紀子 東日本学園大学（日本看護協会助産婦職能委員）